Japanese association of educational psychology

PA 12

小学生中・高学年の共感的反応に対する類似経験の影響

○小林あきの　辰巳有紀子#　　矢吹真理#
（聖心女子大学文学研究科）（お茶の水女子大学人間文化研究科）

【問題と目的】

他者と円滑な人間関係を形成し、より深い対人関係を基盤とした社会生活を送るためには共感性が重要な役割を果たすと考えられる。Feshbach & Roe(1968)によれば、共感性とは他者の情動状態を認識することによって生じた代理的情動反応(Vicarious Affective Response)と定義され、類似特性(例：性別の一致)を持つ刺激人物に対してより高い共感反応が示されるとしている。また他者が遭遇する場面と類似した経験を持つ個人はより共感反応を示すことが推測される。本研究では共感反応に対する類似経験の影響について、情動場面に着目して検討する。

【方法】

1. 予備調査

公立小学校に在籍する児童65名(男児34名、女児31名)を対象に予備調査を行った。Feshbach & RoeによるASTを翻訳して用いた浅川・松岡(1987)の調査を基に新たに3例話を加え、内容を示した絵を同時に提示した。回答は自由記述により求めた。

2. 本調査

調査対象：公立小学校4～6年生106名(男児60名、女児46名)。

共感反応質問紙および分析方法：予備調査の結果より改定し、主人公が男児と女児の2種類の質問紙を用意した。各情動場面（喜び・悲しみ・怒り・恐れ）に対して3例話、計12例話を提示後、それぞれの例話に対応した類似経験の有無について質問した。共感的反応質問については予め5つの選択肢（a；説明文の繰り返し、b；説明文から直接喚起された感想、c；主人公の気持ちを推測しつつも無関心、d；主人公の気持ちを推測しつつも主人公に対するネガティブな評価、e；主人公の気持ちを推測し、その情動を共有する）を設け、選択するよう求めた。本研究においてはeを共感的反応として得点化し、共感的反応得点とした。また主人公の気持ちを推測することが可能であるにもかかわらず、自分には関係ないとするc選択に無関心反応得点を与えた。

【結果と考察】

1. 共感的反応得点の比較

主人公との性別一致群と不一致群を比較したところ、有意差が見られた($t=2.35$, $df=104$, $p<.05$)。先行研究と同様に、本調査においても性別一致群は不一致群に比べ、より高い共感的反応を示した。

各例話における共感的反応の有無と類似経験の有無との間に相関は見出せなかった。

2. 情動場面ごとの共感的反応得点の分析

情動場面ごとの経験と情動場面ごとの共感的反応得点について分析した結果、喜び経験高群は低群に比べ、悲しみ場面における共感的反応をより高く示した($t=1.77$, $df=102.3$, $p<.10$)。悲しみ情動場面3例話のうち1例話の共感的反応において、喜び経験高群と低群に有意差が見られた($\chi^2=5.85$, $df=1$, $p<.05$)。この例話はペットの死の例話であり、喜び経験を多く報告した児童は、自分まで悲しくなるという共感的反応を示す傾向があった。

3. 情動場面ごとの無関心反応得点の分析

情動場面ごとの経験と情動場面ごとの無関心反応得点について分析した結果、怒り経験高群は低群に比べ、悲しみ場面における無関心反応を多く示した($t=1.93$, $df=56.19$, $p<.10$)。また怒り経験を多く報告する児童は悲しみ経験と恐れ経験を多く報告する傾向がみられた。本研究において経験の質問項目は実際の経験の有無ではなく、特定の経験の報告傾向を示していた可能性が考えられ、ある情動経験をより多く報告する児童と共感的反応の表出についての関係が示唆されたといえよう。

今後、情動経験の報告傾向と情動場面ごとの共感的反応の表出について、性差や発達的検討を含めたより詳しい分析が必要であると思われる。また、共感的反応の表出においては例話の影響を非常に強く受ける可能性が考えられるため、例話についてより詳細な検討を行うことが今後の課題である。

NII-Electronic Library Service